

その日を忘れない 思いをつないでいく

今から65年前の広島で、なにがおこったか知っていますか？

「戦争ってなに？」「原爆はどんなもの？」

「平和の大切さを知るために、子どもたちが」ヒロシマで学びました。

禎子像と折鶴



照明の落とされた展示室の中、ライトに照らされガラステーブルに色とりどりの小さな折鶴が並んでいます。この鶴を折ったのは佐々木 禎子さん。2歳で黒い雨により被爆し、10年後、原爆後障害での白血病と診断されました。折り紙がまだ高価だった当時、禎子さんは葉包みを手に「1000羽折ったら必ず良くなる」と、祈るように、鶴を折り続けました。



少年少女 ヒロシマの旅とは

毎年春休み、子どもたちだけでヒロシマを訪れ、原爆資料館の見学や、碑めぐり、被爆体験を聞くなど、目と耳と足を使って平和の大切さを実感し、考えあうものです。

2011年3月28日～3月30日、コープぎふ、コープあいち、コープみえ各生協から19名の子どもたちが参加し、65年前に起きた出来事を学びました。



原爆資料館にて



本館には原爆犠牲者の遺品や、被爆資料が展示されています。原爆の恐ろしさは、爆発の被害だけでなく、その後、何十年と被爆生涯も続いていくということ。目を覆いたくなるような、被爆の惨状を記録した写真や資料。「こわいっ…」とつぶやく子どもたちですが、それでもしっかりと見つめて、原爆の怖さを受け止めました。

8月6日のその日、材木町～木挽町で建物疎開に従事していた、広島市立高等女学校1～2年の少女たちが被爆、尊い命が失われました。当時の少女たちは12～13才、自分たちと変わらない少女たちがたくさん犠牲になったことは、子どもたちに大きな印象をあたえました。



激しい熱で炭化してしまったお弁当箱。
折免シゲコ寄贈
広島平和記念資料館所蔵

広島市立高女慰霊碑にて



少年少女 ヒロシマの旅

本川小学校



原爆の爆風に耐えた本川小学区の外壁。当時では珍しい鉄筋コンクリートの建物でした。



岩田さん

「戦争は感覚を麻痺させてしまいました。戦後の子どもたちはたくさん遺骨が沈む川でも平気で泳いでいたそうです」

戦争は「昔のことではない

「65年前よりも技術はもっと進歩しました。もし今、原爆が発射されたら、みんなは一体どこまで逃げられるでしょうか。戦争は昔のことではありません。この先おこってしまうことかもしれないのです」岩田さんは力を込めます。

生き残った小学校

「原爆が投下されたとき、校舎の外壁を残して、本川小学校は壊滅状態でした。校庭は人が人であふれ、数千の遺体の火葬も行ったんです」と語るのは、被爆二世の岩田さん。本川小学校だけでなく、周辺の地下は今でも多くの遺骨が眠っているといいます。



ぺしゃんこになった広島

「広島は街がぺしゃんこで、何もなくなっているよ」

お母さんと弟とともに、被爆した上田満子さんが見た広島。

原爆で倒壊した家の瓦礫から這い出た母の顔を見て「あっ」と声をあげそうになります。

「髪はさんばら、右半分の顔は赤紫に腫れあがり、特に目はひどく、見えていなかったと思う。でも、おばけでもなんでもない、私のお母さん。生きていて本当によかった」上田さんはそう語りました。

治療のために連れて行かれた小学校でも、薬は十分になく、傷口に油を



上田満子さん

塗るので精一杯だったそうです。その油も、母と弟のような重症者に手当てされることはありませんでした。

「兵隊に、被爆して傷ついている自分と母と弟の写真を撮られました。その写真は(被爆の資料として)アメリカ軍にわたったのでしよう。まるでモルモットのようだと思いました」

被爆当時、13歳の女学生だった上田さんは「私たちだけでなくたくさんの人がどうしてこんな目にあっただのか、いくら考えてもわからない。生き地獄だった」と言います。

家族を奪った原爆

「私が生まれたときから日本は戦争をしていました。それでも原爆が落ちるまでは、貧しくても家族一緒に過ごせることが楽しかった」

しかし、被爆した17日後の8月23日に「まんまんさん(仏さん)を迎えに来た」と言っただが、23日後の8月29日に母が亡くなりました。



証言を聴く子どもたち

語り部として...

母と弟を亡くし、妹を育てながら必死で生きてきた上田さんにとって、原爆は思い出したくない記憶。しかし、ヒロシマの会から「被爆体験」の証言を求められ、心を決めます。—自分の体験を語ることで、多くの人に原爆の怖さを知ってもらえるならば...

「当時学徒だった私は、勉強したくてもできなかった。今、みなさんはいくらでも勉強できます。しっかりと勉強してほしいです。しっかりと食べて、運動してください。元気に、家族と仲良く、助け合って、みなさんが大きくなって平和な世の中が続くように、願いながら、語っています」

2011年「戦争体験聞き書き」作文募集

生活協同組合コープぎふ 地区総合支援部

■企画趣旨

戦争経験者の高齢化と共に戦争の記憶自体が風化し続けています。そのような状況の中、当時の体験を聞き書きする事を通し、戦争時の様々な体験を次世代に受け継ぎながら、日常の暮らしを通じて平和の大切さを考えていくことをめざします。戦争および戦時下の暮らしの体験を今年も「戦争体験聞き書き」という形で後世に残していきたいと思ひます。

■募集内容

戦争および戦時下の暮らし、終戦直後の動乱期の暮らしを体験された方よりその当時の様子をうかがい「聞き書き」をします。
※「聞き書き」…聞き取った内容を文章にすること

■応募期間 2011年7月18日～9月10日

《お問合せ》

生活協同組合コープぎふ 地区総合支援部 三和 栄
〒509-0197 岐阜県各務原市鷺沼各務原町1丁目4番地の1
TEL:058-370-6873 FAX:058-370-6860
E-mail:smiwa@tcoop.or.jp

くわしくは、DEKO7月号、または、お問い合わせください。

少年少女ヒロシマの旅を終えて

子どもたちが「学んだこと、感じたこと」



「被爆者ってなんだろう、被爆者の今が知りたい」と、今回の旅に参加した渡辺大智くん。原爆により広島市の街が壊滅し、たくさんの人が命を落としたことに驚きました。「僕には、家族がいて、給食があって、電気がある生活をしている。でも65年前に被爆した人はそうじゃなかった。もし同じ目にあったらひとりでもうやって生きていけばいいのかわからないと思う」

「戦争でたくさんの方が亡くなったんだという事実」を実感したのは久保田雪菜さん。語り部の上田さんの被爆後の人生や、高橋先生が語った被爆孤児の話にふれ、「自分ひとりになったとき、自分で考えて、生きてきた子どもがいたということに驚いた。自分も頑張りたい」と話してくれました。

広島は初めての池田伊吹くん。上田さんの体験を聞き、改めて、何の罪のない子どもや人が被害にあうような核兵器は決して使ってはいけないものと感じました。

親子で見て考えたい

映画やアニメ絵本

DEKO モニター推薦

いわたくんちのおばあちゃん

NHKのテレビ絵本で読み聞かせのような番組があり、実際にその本を図書館で借りました。



著者 天野 夏美
イラスト はまのゆか
出版社 主婦の友社

戦争で一人生き残ったおばあちゃんの話です。

かわいそうなぞう

小さい頃、寝る前に3人の子どもがそれぞれ好きな本を選び、読み聞かせをして、眠りについたらものです。成人した今も、『かわいそうなぞう』はよく覚えていて、3頭の象の名前を聞くたびに、胸がいっぱいになります。



著者 土家由岐雄
イラスト 武部本一郎
出版社 金の星社

戦争により、3頭の動物園の象も巻き添えになる話です。食べ物を与えず、だんだん痩せ細りながらも、最後の力をふりしぼってえさをもらうために芸をしたりして、それはかわいそうなお話です。

風が吹くとき

絵本を読んだ後、テレビで動画としてみたことがあります。子どもと一緒にですが、BGMだけで、セリフなしなのに、じーっと見入っていました。

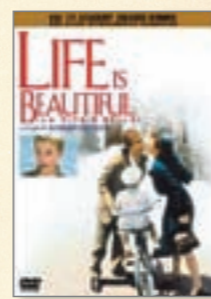


著者 レイモンド・ブリッグズ
翻訳 さくまゆみこ
出版社 あすなろ書房

核爆発で被爆したおじいさんが亡くなっていくまでを、セリフなしで絵だけで表現してある。でもその人の気持ちが、言葉が、手にとるように伝わってくる。今の平和のありがたさがわかります。

ライフ・イズ・ビューティフル

学校で観ました。今でも記憶に残っています。



監督・出演 ロベルト・ベニーニ
販売元 角川映画

ユダヤ人収容所のお話。お父さんが息子に収容所が恐ろしいところだと思わせないように関わる、ユーモアがあり、泣けるお話です。